

「ようだ／らしい／そうだ／という」の連続性

－話し手の情報の扱いの観点から－

陸 心 芬*

目 次

1. はじめに
 2. 問題点及び研究方法
 - 2.1 「ようだ」「らしい」における「伝聞」の現われ
 - 2.2 「という」における「伝聞」の現われ
 3. 「ようだ」「らしい」「そうだ」の連続性
 - 3.1 「ようだ」と「らしい」は推定か伝聞か
 - 3.1.1 「ようだ」と「らしい」の相違点
 - 3.1.2 推定か伝聞か
 - 3.2 「ようだ」「らしい」「そうだ」の認識と情報処理 / 伝達態度
 4. 「そうだ」と「という」の連続性
 - 4.1 「そうだ」と「という」の統語的な共通点と相違点
 5. おわりに
-

1. はじめに

日本語の「伝聞」とは、情報を他人から得て、それを他人に伝えることで成立する。日本語の認識モダリティ形式の中で伝聞専用形式としては「そうだ」がある。「そうだ」は判断を表す「だろう」「かもしれない」「ようだ」「らしい」などの判定のモダリティとは別に「伝聞」として位置付けられている。

* 名古屋大学大学院 文学研究科 博士後期課程 言語学専攻

2. 問題点及び研究方法

2.1 「ようだ／らしい」における「伝聞」の現われ

推定の意味を持つ「ようだ／らしい」は話し手の判断を表すモダリティ形式である。森山(1989)は「そうだ」を「情報把握」、「ようだ／らしい」を「状況把握」と定義して論じた。その分類の基準になるのがキャンセルテストで、叙述内容に対して話し手が「～が、それは違うと思う」を挿入してキャンセル可能なら「情報把握」に、キャンセル不可能なら「状況把握」に分類した。そして「らしい」は叙述内容に対するキャンセルが可能であることを挙げ、情報把握と状況把握の両方で扱われると記述した。即ち、「らしい」は推定と伝聞の両方に現れる可能性がある。

- (3) a.*彼が部屋にいるようだが、それは違うと思う。
b.彼が部屋にいるらしいが、それは違うと思う。
c.彼が部屋にいるそうだが、それは違うと思う。 (森山1989:68-9)

一方「ようだ」は叙述内容に対する話し手のキャンセルが不可能なので、判断が行われた「状況把握」の推定文であると位置付けた。「そうだ」は叙述内容をキャンセルできるので、「情報把握」の伝聞であることを示している。

森山のテストから考えると(3)aの「ようだ」は「状況把握」の表現になり、伝聞になりにくい文であることが分かる。ところが、野林(1999)は(2)の「ようだ」が「らしい」「そうだ」と入れ替え可能なことから、「ようだ」も伝聞を表せると論じた。両者をまとめると「ようだ」は自分の判断でありながらも伝聞の意味も表せることができる表現と言えるだろう。しかしながら、「ようだ」や「らしい」が伝聞を表す場合、判断を行っていないことになり、そのために認識のモダリティの下位分類としての「伝聞」に位置付けられるのだろうか。つまり、「ようだ」「らしい」が推定を意味する場合は判定のモダリティで、伝聞を意味する場合は判定のモダリティと言えないことになるのだろうか。一見、話し手が判断を行った「判定のモダリティ」と判断を行っていない「伝聞」は矛盾しているように思われるが、3.2で「判定のモダリティ」と「伝聞」が話し手の認識と情報処理／伝達態度の違いによって使い分けられていることを論ずる。

この疑問点を解決するため、本稿では、伝聞の意味を表す場合の「ようだ」と「らしい」について森山(1989)が行った「判断のテスト」を利用し、認識モダリティの中で判定のモダリティと伝聞が現れる際の曖昧さを指摘する。すなわち、「ようだ」「らしい」が判断を行っ

ているかどうかに対する認識を通して、「ようだ／らしい／そうだ」に話し手の情報のストックを根拠にして発話態度による違いがあることを明らかにする。さらに、三つの表現が話し手の主観的な認識態度で連続していることを確認する。

2.2 「という」における「伝聞」の現われ

伝聞の専用形式としての「そうだ」は認識モダリティに分類される。一方、「という」は引用表現であるため、文法分類上の違いが見られる。ところが、「という」が間接引用に使われた場合を伝聞の「そうだ」と比較した場合、伝達内容に対する共通点があることが分かる。さらに、鎌田(2000:98)は様態・伝聞を表す「ようだ／らしい／そうだ」などは間接引用を行うと述べている。

(4) 彼は [昨日東京へ行った] といった。

(5) [彼は昨日東京へ行った] そうだ。

(6) [彼は昨日東京へ行った] という。

(4)は引用元の発話者(以下、元発話者) [彼] が現れていて、[昨日東京へ行った] が引用される部分になり、直接的に引用された文である。[と]は直接引用文で使われる。(5)と(6)は [彼は昨日東京へ行った] が伝達内容であり、元発話者は明示されない。モダリティ表現としては伝聞であり、引用表現としては間接引用である。(5)では「そうだ」が(6)では「という」が使われ、この場合入れ替えも可能である。また、井上(1983)、寺村(1984)、中島(1992)は「という」に伝聞の意味があることを認めている。つまり、「そうだ」と「という」が文法範疇を別にしながら、伝達内容において共通しているということは、伝聞と引用に何らかの関係性があると考えられる。そのため、「そうだ」と「という」の統語的な構成を元に、伝聞・引用の関係性を明らかにしていく。

3. 「ようだ」「らしい」「そうだ」の連続性

本節では、推定の「ようだ／らしい」が伝聞の意味を持つ場合について、伝聞の「そうだ」との間のモダリティ的な位置付けの関係を明らかにする。3.1では「ようだ」と「らしい」が意味的に推定を表すか伝聞を表すか分かりにくい点を指摘し、3.2ではそれをより明

確にするため森山のキャンセルテストを導入する。そして、「ようだ／らしい／そうだ」が話し手の主観的な認識態度というスケールで連続していることを示す。

3.1 「ようだ」と「らしい」は推定か伝聞か

3.1.1 「ようだ」と「らしい」の相違点

「ようだ」と「らしい」の用法については多数の研究がなされてきた(柴田1982、寺村1984、早津1988、中島1990など)。「ようだ」と「らしい」が推定を表す場合、入れ替えが可能だが、その意味的な違いに対して早津(1988)は、柴田(1982)の「心理的距離」論に対して、「心理的距離が遠い事態」でも「直接的な根拠」に基づいて判断する可能性や、「心理的距離が近い事態」でも「間接的な根拠」に基づいて判断する可能性がある」と指摘し、判断の根拠と「発話主体の心的態度」(「ひきよせ」と「ひきはなし」として論を展開している。

以上の議論から、推定を表す「ようだ」と「らしい」はそれぞれ話し手の判断と他者的な判断による推定を表していると定義でき、その違いは発話主体の心的態度にあると解釈できる。(7)～(12)の「ようだ」と「らしい」はお互いに入れ替えが可能な場合の例である。(以下、例文の{}の中の左の要素が、出典において実際に用いられているものである。)

(7) 「キャッ!と思わず声を上げる。「し、失礼しました 相手の方がびっくりした{ようだ/らしい}。(女社長に乾杯!)

(8) 見島は窓を開けて覗くと、「うちの社員たちだな。私を歓迎しようと待っていている{ようだ/らしい}。(女社長に乾杯!)

(9) 「実にそのとおり。どうやら私は思うに、あなたはあの娘のことを十全に理解しておられる{ようだ/らしい}。(世界の終りと～)

(10) 「いえね……。どうやらうちの会社、倒産した{らしい/よう}ですよ (女社長に乾杯!)

(11) 雄一も手伝ってくれた。彼は今夜はヒマ{らしい/のようだ}。(キッチン)

(12) どうやらこの眼鏡は簡単に取りはずすことはむずかしい{らしい/ようだ}。(二十歳の原点)

3.1.2 推定か伝聞か

「ようだ は早津(1988)が論じたように話者的判断であるため、伝え聞いた間接情報を他人に伝える場合「ようだ」文では普通「伝える文」が成立せず、「伝える文 だとしても伝聞より婉曲な表現のように感じられる。ところが、(13)~(15)の「ようだ」は推定を表しているが、「らしい」「そうだ」に入れ替えると伝聞のように感じられる。また、(16)の「ようだ は、伝え聞いた根拠、つまり、「話によれば」が出ているので伝聞のようだが、「話によれば」を除くとただの推定文に解釈される。(17)はスミさんが帰国したことを聞いて「ようだ」を用いて伝える文であるが、「そうだ」のように、直接「スミさんが帰国した」と聞いたというニュアンスはない。つまり、聞いて知っているが判定を避けて遠回しに表すという話者的な表現の性質が強いのである。したがって、この場合についても「伝聞性」は相当低い。

(13) 「オトちゃんに気に入られていれば、仲間はずれにされることはない とみんなが思っていたようだ。(五体不満足)

(14) とくに、両親は小学校への壁が最も厚いものと感じたようだ。(五体不満足)

(15) それは私の耳にはまるっきりの嘘に聞こえたが、男は層は感じなかったようだった。(世界の終りと~)

(16) 「話によれば君の影はずいぶん元気をなくしておるようだ。~(世界の終りと~)

(17) (スミさんが帰国した話を聞いて、スミさんを探している人に対して)「スミさん、昨日帰国したようです

このように(13)~(17)の「ようだ」は「伝聞」としての意味伝達機能が「そうだ」より低いことが分かる。

また、「らしい は早津(1988)が論じたように他者的な判断を行う表現であるため、比較的「ようだ より「伝聞」の意味になりやすい。しかしながら、依然として文脈を見なければ伝聞の文であるか推定の文であるか分かりにくい場合がある。(18)~(22)は伝え聞いた根拠が明示されていない文で、推定と伝聞の両方の意味で読める。(23)~(24)では「どうやら という陳述副詞と共に使われていて、推定である蓋然性が高くなっているが、陳述副詞がないと推定であるかどうか分かりにくい。(25)~(26)は「話によると」によって伝え聞いた情報であることが明示されている。

(18) 「柳さんが五百万? そりゃまた…… 「それを、私からだと言って貸したらしいのよ(女社長に乾杯!)

- (19) 「大輔たちさ、ほんとうに行つたらしいね。どうしようもないよ。あいつら。(ハッピーバースデー)
- (20) 「いえ、それを各目上、三人の社員の方の名前を使って借りたらしいのです。もちろんそれは規則違反なわけで、他の二人の方は何も知らないんですもの」(女社長に乾杯!)
- (21) 昼休みに掃除会社のほうへ電話を入れてみると、遊佐はなにか事情があつて休みをとつたらしい。(危険な場所)
- (22) 相手は意外に辛抱強く待っているかもしれないし、伝言板かなにかに指示が書いてあるか藻れない。二、三時間くらい待つ人つて案外いるらしいからね。(待っている男)
- (23) 「いえね……。どうやらうちの会社、倒産したらしいですよ(女社長に乾杯!)
- (24) 一番最初のときには油壺へ行くのをすっぽかされ、二度目には駆け落ちをやりそこない、今日も来そうもない……。待ち人はどうやら私の前には現れない仕組みになっているらしい。(待っている男)
- (25) もっとも高木の話によると、初めからそれほどはっきりした目的でブレーンを作ったわけではないらしい。(山本五十六)
- (26) 保さんの話によると、それでも奥さんや娘さんは、二階に寝るのを憚つてか夜は台所で寝ているらしい。(黒い雨)

このように、「らしい」においては推定、伝聞の両方に使い分けが可能なことが分かる。問題は伝聞を表しているとしても「そうだ」と同じような認識に基づいているかどうかである。3.2では「ようだ／らしい／そうだ」がどのような話者の認識と情報処理／伝達態度によって使い分けられているかについて考察しよう。

3.2 「ようだ」「らしい」「そうだ」の認識と情報処理／伝達態度

野林(1999)は(27)の例を挙げ「ようだ」に伝聞の意味があることを認めている。確かに「らしい」「そうだ」に入れ替えが可能で、伝聞の意味を表していると考えことは可能であろう。本節では伝聞の意味を表す三つの違いを考察し、この三つにおいて話し手の認識と情報処理／伝達態度によって違いが見られることを明らかにする。

- (27) (話者が、妙子から聞いて間接的に知った「建築技師たちの報酬の話」を誰かに述べるような場面) ただ、何時か妙子がいったところによると、建築技師たちは、給料

いがいの、アルバイト料が多いようである／ラシイ／ソウデある。(例文(2)の再掲)

三つの形態の違いは森山(1989)が行った叙述内容に対するキャンセルテストからもヒントが得られる。キャンセルテストは「ようだ」文を中心に「らしい」「そうだ」が入れ替えられる(27)(16)(17)を挙げ、(28)~(30)のようにテストを行い、三つの形態の関係を探る。

(28) (話者が、妙子から聞いて間接的に知った「建築技師たちの報酬の話」を誰かに述べるような場面) ただ、何時か妙子がいったところによると、建築技師たちは、給料
いがいの、アルバイト料が多い{??ようだ／?ラシイ／ソウだ}が、それは違うと思う。

(29) 話によれば君の影はずいぶん元気をなくしておる{??ようだ／?ラシイ／ソウだ}
が、それは違うと思う。

(30) (スミさんが帰国した話を聞いて、スミさんを探している人に対して) スミさん、昨日
帰国した{??ようだ／?ラシイ／ソウだ}が、それは違うと思う。

上の(28)~(30)を見ると「ようだ」は「らしい」よりキャンセルしにくく、「らしい」は「そうだ」よりキャンセルしにくい。

したがって、「ようだ」と「らしい」は「伝え聞いた情報」について話者の判断が行われたとすることができるし、入れ替えが可能な場合は下で説明する話し手の態度が関係していると言える。つまり、「ようだ」は「伝え聞いた情報」を自己情報にストックし、発話するときも自己情報として判断し発話している。これに対して、「らしい」は伝え聞いた情報を自己情報としてストックし、発話するときは他者情報で判断して発話している。また「そうだ」は他者の情報としてストックし、話者の判断を行わずそのまま他者の情報として発話している。まとめてみると、表1のようになる。

表1 話し手の情報の扱い及び発話態度

	ストック	発話態度
ようだ	自己情報	自己情報
らしい	自己情報	他者情報
そうだ	他者情報	他者情報

上記と同じように伝え聞いた内容に「ようだ／らしい」が使われる場合、情報のストックの方法と発話態度の違いにより伝聞の意味を表していながらも判断を行っていると言える。したがって、「ようだ／らしい」は判定のモダリティに属していると言える。また、「よう

だ／らしい／そうだ」の伝達内容に対する話し手の主観的な認識態度は「ようだ>らしい>そうだ」の順になることが分かる。ただし、「ようだ」「らしい」と「らしい」と「そうだ」の違いと情報処理・発話態度との関わりについては、さらに検証が必要であろう。

4. 「そうだ」と「という」の連続性

4.1 「そうだ」と「という」の統語的な共通点と相違点

中畠(1992)は統語的な面から伝聞を①元の発話者が特定される必要がない②命令、疑問、意思、勧誘など陳述度の高い成分と共起しない③「夕刊をとらない」④伝え手の心的態度をもとに事柄を捉え直して伝える、の四つに特徴付けて直接引用と区別している。

このうち、伝聞を定義する条件に当てはまるのが間接引用の「という」で、「そうだ」のようなモダリティ性があると言える。つまり、伝聞の「そうだ」と間接引用の「という」は話し手の認識的な態度が連続している。(31)～(34)は「という」と「そうだ」の入れ替えが可能な文である。

(31) 約50人の職員は半分に削られ、消防大学校の付属研究センターとして再出発する{という/そうだ}。(2006.2.20. 朝日新聞社説)

(32) 問題の原因は、業者や農務省の検査官が日本向けの輸出条件を十分に認識していなかったことだ{という/そうだ}。(2006.2.19. 朝日新聞社説)

(33) その結果、本当なら3億円余の赤字なのに、50億円ほどの黒字だとする決算書を作成した{という/そうだ}。(2006.2.23. 朝日新聞社説)

(34) 民主党によると、今回の質問を事前に知らされていたのは野田佳彦国対委員長と前原氏らごく少数だった{という/そうだ}。(2006.2.23. 朝日新聞社説)

次は「そうだ」と「という」の違いについて言及する。「そうだ」は3.2で述べたように「伝えた内容」を他者の情報としてストックし、他者に伝えるとき他者の情報として伝える表現とした。また、「という」と異なる「そうだ」は話者の認識モダリティを表す表現であるため一人称は出てこない。反面「という」は「そうだ」と統語的・意味的に類似しているが、(35)のように元発話者が現われる場合は直接引用になる。つまり、(35)は[先生]が元発話者になり、直接言ったことを伝える直接引用文になる。(36)は[先生]が東京

へ行く主体になり、元発話者は現われていない間接引用文になる。

(35) 先生は [明日東京へ行く] と言う。

(36) [先生は明日東京へ行く]そうだ。

つまり、「という」は間接引用と直接引用にまたがるため、「そうだ」より話者の主観的な認識の度合いが低い。さらに、過去形の「といった」は直接引用の表現でしか現われないので、間接引用も表しうる現在形の「という」とは異なり、話者の認識に関わらない表現と言える。

5. おわりに

「ようだ／らしい」「そうだ」「という」は「伝え聞いた内容」を根拠として他者に伝える場合、伝聞の意味をもつという共通点がある。ところが、文法上の位置付けが異なっており、その違の関係性が明らかではなかった。その問題点について、本稿では四つの表現を発話するときの認識態度に連続性があることに注目し、推定の「ようだ／らしい」、伝聞の「ようだ／らしい／そうだ」、間接引用の「という」には認識的な伝達態度の上で共通性が見られることを明らかにした。

以上の結果をまとめると次の通りである。

① 推定を表す「ようだ」「らしい」が「そうだ」と同じように伝聞の意味を表す場合、三つの形式は、情報のストックや話し手の発話態度によって話し手の主観的な認識態度に対する連続性が見られることを明らかにした。

② 間接引用を表す「という」はモダリティ表現の「そうだ」とほとんど同じように伝聞の意味を表すことを指摘し、推定の「ようだ／らしい」から伝聞の「そうだ」、間接引用の「という」まで話し手の認識のタイプの違いによって連続性が見られることを明らかにした。

このように日本語の「そうだ」は推定と間接引用表現の両方にまたがる表現で、間接引用から推定表現に至るまで、話し手の認識上の連続性が見られるという結論が得られた。以上のことを表2にまとめる。

表2 推定／伝聞／間接引用の連続性

文法範疇	モダリティ		引用		
	判定(判断)		傳聞	間接引用	直接引用
形 式	ようだ	らしい	そうだ	という	という/ といった
情 報 源	様子 / 言葉		言葉		
ス ト ッ ク	自己情報	自己情報	他者情報		
發話態度	自己情報	他者情報	他者情報		
意味表出	推定		傳聞	引用	
話し手の主観的な 認識態度の程度	高 ←—————		低	0	

これからの課題としては、情報処理、発話態度と使用される形態の関係について実証的に検証することが必要である。また、接続形態が異なる、様態を表す「(し)そうだ」と属性描写を表す「Nらしい」までを視野にいれ、様態と比喻表現が話し手の認識的な連続性によって説明できるか否かについても検討していきたい。

【参考文献】

- 井上和子(1983) 「日本語の伝聞表現とその談話機能」、『月刊言語』Vol.12・No.11、大修館書店、pp.113-121
- 鎌田修(2000) 『日本語の引用』、ひつじ書房
- 柴田武(1982) 「ようだ・らしい・だろう」、国広哲弥編『言葉の意味3』、平凡社、pp.87-97
- 高見健一(2003) 「伝聞が伝聞でなくなるとき」、『月刊言語』Vol.32・No.7、大修館書店、pp.29-35
- 野林靖彦(1999) 「類義のモダリティ形式「ヨウダ」「ラシイ」「ソウダ」—三水準にわたる重層的考察—」、『国語学』、197集、pp.54-68
- 寺村秀夫(1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』、くろしお出版
- 中畠孝幸(1992) 「不確かな伝達—ソウダとラシイ—」、『三重大学日本語学文学』、3号、pp.15-24
- 仁田義雄(1991) 『日本語のモダリティと人称』、ひつじ書房
- (1992) 「判断から発話・伝達へ—伝聞・婉曲の表現を中心に—」、『日本語教育』77号、pp.1-13
- 仁田義雄・他(2003) 『現代日本語文法4—第8部モダリティー』、くろしお出版
- 早津美恵子(1988) 「「らしい」と「ようだ」」、『日本語学』Vol.7、明治書院、pp.46-61
- 森山卓郎(1989) 「認識のムードの型式をめぐって」、仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』、くろしお出版、pp.57-74
- (1995) 「「伝聞」をめぐって」、『京都教育大学国文学会誌』、26号、京都教育大学国文学会、pp.25-36
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩(2000) 『モダリティ3』、岩波書店

【実例の出典】

『朝日新聞—2006年、社説』・『キッチン』吉本バナナ(1988)・『五体不満足』乙武洋匡(1955)・『待っている男』、『危険な場所』安部田高、다락원(1991)・『ハッピーバースデー』青木和雄

〈以下は CD-ROM 『新潮文庫の百冊』 1995より〉

『黒い雨』・『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』・『女社長に乾杯!』・『二十歳の原点』・『山本五十六』

要 旨

日本語のモダリティ表現には、伝聞専用形式として「そうだ」がある。また、推定を表す「ようだ/らしい」も、情報が他人からである場合は、伝聞の意味を持つ。一方、引用の「という」が間接引用である場合、「そうだ」と意味的な機能が類似して伝聞の意味を表す。これらの四つの形式は文法範疇が異なりながらも、共通して「伝聞」という意味を持つ。

本稿ではそうした共通点に着目し、各形式間には「話し手の主観的な認識態度」に対するグラデーション化が見られることを明らかにする。本稿の構成は以下の通りである。

①推定を表す「ようだ」「らしい」が「そうだ」と同じように伝聞の意味を表す場合、三つの形式は、情報のストックや話し手の発話態度によって話し手の主観的な認識態度に対する連続性が見られることを明らかにする。

②間接引用を表す「という」はモダリティ表現の「そうだ」とほとんど同じように伝聞の意味を表すことを指摘し、推定の「ようだ/らしい」から伝聞の「そうだ」、間接引用の「という」まで話し手の主観的な認識態度の違いによって連続性が見られることを明らかにする。

キーワード：認識モダリティ、推定、伝聞、間接引用、情報のストック、発話態度、連続性

투 고 : 2006. 11. 30
1차 심사 : 2006. 12. 9
2차 심사 : 2006. 12. 30

住 所 : (466-0804) 日本 名古屋市 昭和区 宮東町 21番地 コーポ豊 A-106
電 話 : (日本) 090-4255-9308
e-mail : simbun@hanmail.net